

令和7年度 府立亀岡高等学校 学校経営計画(スクールマネジメントプラン) 実施段階

学校経営方針		昨年度の成果と課題		本年度学校経営の重点	
生徒一人一人が個性や能力を伸ばさせ、自立的に社会に参画し、人権尊重を基盤として共に支え合いながら、地域社会の一員としての役割を果たすことが求められています。このため、教育目標や教育方針に基づき、「自立し、ともに学び続ける(対話・挑戦・創造)」を最上位目標に掲げ、各学科、クラス、専攻がそれぞれの特色を活かしながら切磋琢磨することで、学校の活性化を図ります。 「自立し、ともに学び続ける」(対話・挑戦・創造) (1) 質の高い学びと確かな進路実現の具現化 (2) 社会的自立を図るために必要な資質・能力の育成 (3) 地域・保護者に信頼される社会に開かれた学校づくり		(成果) ・地域や関係機関と連携することで学習活動が充実したのとなり、生徒の多様な進路に対応することができた。 ・普通科、探究文理科それぞれの取組の成果を学校全体に広げることができた。併せて、学校外へも発信する機会を持つことができた。 ・家庭等との連携や教職員間の連絡を密にし、生徒理解の促進、組織的な支援体制の充実を図ることができた。 ・学習指導要領及び観点別評価について、評価の在り方等に関する研究を継続できた。 ・個に応じた希望進路の実現に向け、校内体制の確立を図ることができた。 ・文化祭・体育祭では、生徒が主体的に参加し協働する力を高めることができた。 ・人権学習は時代の変化に合わせて取り扱う内容を更新させながら、工夫・改善して実施できた。 ・施設等の破損箇所・不良箇所について、教職員間で連携し、スピード感をもって修繕に努め、安心・安全な教育環境の維持管理に努めることができた。 (課題) ・探究文理科と普通科の活動の共有を更に継続して行い、互いに刺激を受けることで活動をさらに深化させる。 ・公開授業週間を積極的に活用するなど、わかりやすく質の高い授業実践に取り組み、生徒の主体的に学ぶ意欲を喚起する。 ・Can-Doリスト3級の達成率を向上させる取組についてさらに工夫する。 ・学校行事等における生徒の主体的な活動の促進のための仕組みづくりや、実施方法などの改善に努める。 ・ホームページやWeb・SNSなどを利用した発信の仕方を工夫し、亀高生の日々の活動の様子を発信するツールとして有意義に活用する方法を確立する。		高い人権意識を持ち、未来を切り拓き社会に貢献、牽引できる人材の育成 ○ 自らの将来を見据える ・自らの将来を見据えて進路目標を定めることをねらいとしたキャリア意識の高揚 ・的確な学力分析に基づく教科指導と、学科・専攻に応じた組織的・計画的な進路指導の実施 ○ 主体的に学ぶ ・学ぶ意欲を喚起し、質の高い授業実践に向けた授業力向上・ICTの効果的活用のための研修の実施 ・学習指導要領の確かな実施・個別最適な学びの研究 ・探究活動の更なる充実 ○ 社会に通じる ・社会に通じる力を育む「ジェネリックスキル」や「探究クリエーション」の深化と、Can-Doリストの積極的活用 ・デジタルシチズンシップ教育の充実 ・生徒が主体的に参加する行事、部・ボランティア活動等の実施 すべての教育活動で重点的に取り組む内容 ・人権学習、教職員人権研修の充実 ・地域や関係機関との積極的連携 ・教育DXの効果的活用 ・防災教育の充実 ・教育活動の積極的広報 ・安心、安全な教育環境の整備 特色ある取組 ・スーパーサイエンスネットワーク京都(府立高校特色化事業) ・国際理解教育 ・まなびサポート事業 ・DX加速推進事業	
評価領域	重点目標	具体的方策		成果と課題	
組織・運営	魅力ある学校づくり	1	各学科、専攻とも地域や関係機関との連携を積極的にを行い、特色を活かした取組を充実させる。	A	普通科においては、ジェネリックスキルの授業で卒業生や大学教員、市役所の方に御講演いただいたほか、地域の魅力発信の取組で亀岡市内各所に取材をさせていただくなど、多くの外部の団体に携わっていただいた。また、探究文理科においても、探究クリエーションや土曜探究講座で大学や自治体、企業などに講演等を行っていただくなど多くの御支援をいただいた。 普通科美術・工芸専攻では高大連携事業として1、2年生が各3回の体験授業・学校見学を行った。伝統文化事業として、茶碗刷毛作りや藍染制作を実施した。また地域の芸術祭への生徒の参加及び、地域で活躍するアーティストの講演会を実施するなど、多様な進路選択や生徒の興味関心に対応した取組を行った。次年度以降の継続が課題である。
		2	ジェネリックスキル、探究クリエーションの取組を工夫・充実・深化させ、学校全体の探究活動の幅をさらに広げる。	A	京都探究エキスポでは探究文理科、普通科の代表生徒による合計4つのグループがポスター発表した。活発な質疑応答があり、学校の枠を超えて探究的な学びを深めることができた。 普通科ではコミュニケーション力の養成のため、3学期に1、2年生合同で演劇の団体によるインプロビゼーション(即興演劇)の授業を実施している。例年どおり、同団体による教職員研修も実施した。 3学期には過去に探究文理科対象に講演をしていただいた講師に、第1学年の進路探究講演会を依頼し、生徒たち自身が将来を考えるきっかけづくりを行った。
	信頼される学校づくり	3	家庭や地域、関係機関との連携を図り、個々の生徒が抱える課題の把握や配慮・支援を要する生徒へのきめ細かな指導を組織的に行う。	A	個々の生徒への支援等について、関係の校内会議に参加して、地域や関係機関との連携をとることができた。 生徒の実態を把握し、本人の課題認識の助けに努め、保護者の理解、関係機関との連携を進め、適切な配慮・支援を実施した。 年間を通して家庭や関係機関との関係構築を図り、個々の情報共有を行った。特に、配慮・支援を要する生徒については、注意深く情報共有を行った。 生徒に関して、家庭や関係機関と適切に連携が取れている。特に、配慮・支援を要する生徒については、校内でもきめ細かく連携を行い、情報共有を行った。 各家庭と連携を図り、課題の把握、解決に努めた。心身あるいは家庭に課題があると思われる生徒も一定数おり、状況に応じて対応した。
		4	Web、SNSなどを利用して生徒の学びの様子を発信し、広報活動を効果的に行う。	A	インスタグラムを利用して、学校生活の様子や学校紹介を本年度97件投稿(1月20日現在)することで、フォロワー数が昨年度末より1.68倍に増加した。学校説明会の申込等を学校ホームページ(Forms)を通して行うことで、スムーズに対応することができた。 また、美術・工芸専攻においてはインスタグラムを利用して、4月から33件投稿(1月20日現在)することで、美術・工芸専攻の学びの様子を積極的に発信することにより、中学生と保護者の体験授業や学校説明、美技講習への参加につながった。年間50件の投稿の目標には届いていないが、昨年度よりは投稿頻度が高まっている。
教育課程 学習指導	学力の向上	5	タブレットや学習支援ツールを効果的に活用した授業実践に取り組み、わかりやすい授業づくりのための授業力向上に努める。	A	公開授業週間を年2回設定し、積極的に授業を参観いただくことにより、タブレットや学習支援ツールを効果的に活用した授業実践を共有する機会とした。 学習用端末配布時(1年4月)に高校で利用するアプリの一覧とその利用方法を示し、授業でタブレットを効果的に活用するための情報提供を行った。また、教員については、校内DX活用推進プロジェクトを立ち上げ、チーム毎に定めたテーマに従い授業力向上等に資する研究を行った。
		6	学習指導要領の確実な実施に伴い、授業や考査、個に応じた指導、円滑な評価を行う。	A	教育課程研究協議会に各教科から担当者が参加し、その内容を教科会等において伝達・共有することで、急激に変化する時代を生きていく生徒たちに必要な資質・能力を育成する授業の実践につなげた。 考査実施に当たっては、特別室受験やルビを付した問題での出題等、個に応じて対応した。
進路指導	希望進路の実現	7	各学科、専攻の特徴に応じた組織的・計画的な進路指導を充実させることで、生徒の進路実現の可能性を広げる。	B	探究文理科や美術・工芸専攻の特徴を生かした独自の取組で、志望の掘り起こしや個に応じた指導などの成果が得られていると考える。小論文や面接などの個別指導を全校体制で計画的に実践できている。近年の総合型や学校推薦型への志望者増加に対応するため、枠組みの整理・見直しが必要であり進路指導会議で総括をしたい。 探究文理科では探究活動を生かして国公立大学の総合型・学校推薦型の受験方式で受験をする生徒が多く、進路実現につなげた生徒も複数見られた。 美術・工芸専攻独自の進路プログラムを「未来デザインプロジェクト」と総称して、学校見学・体験授業(高大連携事業)やかめおか霧の芸術祭とコラボレーションしてクリエーターの講演会を実施した。また、大学の教員による出張授業を2回実施するなど、生徒の進学意識の向上に役立てることができた。
		8	的確な学力分析に基づいた教科指導、進路指導を行う。	B	成績会議にあたり、各教科・科目の評定について分析を行い、その妥当性や公平性の観点から評価の適切さを確認した。 授業内実施の模試について、全体概況を共有し、各教科での分析と教科指導への反映をお願いしている。「学力」の定点把握だけでなくとどまらず、生徒の学習への取組を支援・促進するため、課題共有や方策の議論が必要であり、そのような場を設定したい。
キャリア教育	キャリア教育の充実	9	キャリア意識の高揚のため、第1、2学年を対象に「キャリア10」の取組を実施する。	B	今年度は年度当初に「キャリア10」を策定した。「キャリア講演会」はキャリア教育の起点行事になるものであった。キャリアパスポートとしての積み上げをより意識的に行えるよう他分掌との連携を進めたい。 進路行事のそれぞれがつながりのある取組となるように意識し、講演会や職業調べの取組を通じて、自分の将来像や職業について考える機会を作った。 昨年度と比べ、進路行事について、キャリア10の視点から意識づけができた。
	社会に通じる力の育成	10	Can-Doリスト3級の達成率を向上させる取組についてさらに工夫する。	B	ジェネリックスキルは、1、2年生の取組は外部との連携を積極的に図った。2年生では「動画クリエイト甲子園」において一次審査を通過した班が46グループ中14グループあった。Can-Doリスト卒業時全項目達成率は62.7%(2月4日現在、昨年度55.6%)であった。 文化祭や体育祭等、今まで以上に積極的に取り組む生徒が多くなった。学年末のCan-Doリストについてもスムーズに自己評価している生徒が多く、普段からCan-Doリストに通じる力を意識して行動しようとする姿勢も感じられた。
	国際理解教育の充実	11	グローバル社会に対応した多様な文化の理解に向けた取組を進める。	C	府教委の事業であるオーストラリア語学研修に2年生1名が参加。トビタテ留学JAPANに1年生1名が応募。また、現在京の高校生「海外探Q留学」について、周知を行い、積極的な応募を促進するように努めている。次年度秋、ニュージーランドからの留学生受け入れ(9名、1週間、ホームステイ)の準備を進めている。
生徒指導	学校行事、部活動等の充実	12	体育・スポーツ、芸術文化活動の活性化と、学校行事及び特別活動の充実を図る。	A	文化祭、体育祭とも大きな混乱なく実施され、生徒の参加意欲も高く成功裏に終了した。しかし、企画立案や運営の多くを教職員主導で行っている現状があり、生徒がより主体的に関わる場面をさらに拡充していくことが今後の課題である。芸術文化活動に関しては、1年生(狂言)と3年生(演劇)で芸術鑑賞を実施し、有意義な取組であるため来年度も実施する予定である。
		13	部活動やボランティア活動への積極的参加を通して、健全な心身の発達を目指す。	A	部活動加入率は全体で85.7%、1年生93.4%と直近の3年間で最も高かった。同好会も含めて30の部活動が意欲的に活動に取り組んでいる。ボランティア活動においては、クリエーションキャンペーンをはじめ、光秀まつりや亀岡祭への参加など、生徒の向き合い姿勢が見られ、地域との交流を深める取組となった。 実施4年目となった「まなびサポート」事業には、第1期5回延べ55名、第2期31回延べ101名、第3期21回延べ101名、合計(小・中学校・児童クラブ)57回延べ257名の生徒が自主的に参加した。また、この事業は生徒が自分の将来について考える貴重な体験となっている。
	生徒の自立・自律	14	学校行事の企画や運営に生徒が主体的に参加できるようより一層の工夫を図る。	A	生徒会活動全体としては、昨年度の取組を踏襲することができたが、新たな展開という点では改善の余地がある。その中で、体育祭においては体育委員による団色発表の方法の提案や新競技の導入など、生徒の工夫により行事の盛り上がりが見られた。今後は、教職員が設定した枠組みにとどまらず、生徒自身がより多くの意志決定に関わることができる体制づくりが求められる。 各クラスの文化祭実行委員会を中心に主体的に運営できた。学年行事は、委員が学年でミーティングを重ね、積極的に取り組むことができた。 文化祭の運営は、各クラスのリーダーを中心に主体的に運営できた。研修旅行も、委員を中心に生徒が主体的に関わることができた。学習、進路に関わる学年としての取組を計画画中である。 学校行事に主体的に取り組む生徒が3年間で増加したと感じている。ただし、綿密に計画を立てさせる等の指導が必要となる場面もあった。
		15	社会人としての自覚と責任を一層意識させる指導を行い、デジタルシチズンシップ教育をさらに充実させる。	B	学習用端末配布時(1年4月)に情報端末の利用規程を示し、情報機器の利用について考える機会としている。また、デジタルシチズンシップ教育推進のための計画を立案した。 1年生を対象としたSNS講演会を実施し、情報モラルやトラブル防止に関する意識啓発を図ることができた。今後は、継続的な注意喚起および指導を行うとともに、トラブル発生時の対応等を再確認していく。デジタルシチズンシップ教育についてはさらなる充実と工夫が必要である。教員も意識を常に革新していく必要がある。
		16	人権学習について、方法等を工夫改善し、自他の生命や人権を尊重し、人権問題を自らの課題として捉え、解決に向けて実践できる資質・能力を育成する。	B	3年間の人権学習計画ができており、毎年生徒の反応も良かったため、昨年度と同じ内容を行った。1年では「アサーション」「障がいと人権」「性の多様性と人権」、2年では「外国人と人権」「部落差別問題」を考える、3年では「就職差別について考える」「多文化共生社会を生かす」というテーマで学習し、人権について考えるきっかけとした。ただ予定していた2年1学期の講演会は、講師の都合により代わりの視聴覚教材を用いて実施したが、やはり生の声によるインパクトは大きいと感じた。全体として、その時間だけの学習にならないようにする工夫が必要だと感じた。
教職員の人権意識向上	17	高い人権意識に基づく教育活動を実現するために、教職員研修を充実させ、人権意識の高揚を図る。	A	口丹地域以外出身の教員が多い中、地元の方の講演を聴くことができ、有意義な教職員研修が実施できた。全体での年に1回の研修に加えて、府高人研による研修等の活用を教職員へ周知するなど、自己研修の機会を提供することに努めたい。	

令和7年度 府立亀岡高等学校 学校経営計画(スクールマネジメントプラン) 実施段階

学校経営方針		昨年度の成果と課題		本年度学校経営の重点	
健康・環境 美化	美化意識の高揚	18	清潔な学習環境を保つ清掃・衛生管理を進める。	B	清掃活動を通して日々の環境整備に努め、備品、消耗品などの充実も実施することができた。
	健康管理	19	健康診断、経過観察、事後指導を充実させ、生徒の健康管理、生活習慣の改善に努める。	A	健康診断に関して、全ての指導を組織的に終えることができ、経過観察、事後指導を適切に行うことができた。
防災教育	防災教育の充実	20	防災教育の充実により意識を高め、自らのいのちを守り、ともに助け合う力を育む。	B	9月に1年探究文理科「探究クリエーションⅠ」において、南丹広域振興局および亀岡市消防団長に講師を依頼し防災学習を行った。1年のミニ課題研究では、2グループが防災をテーマに探究を行った。11月に1年家庭基礎、2年家庭基礎演習、3年フードデザインにおいてアルファ化米を活用した調理体験を行った。11月に亀岡消防署と連携して避難訓練を実施した。実践に近付けるため、通常の駐輪・駐車の状態の中庭等へ集合し点呼を行った。生徒の移動、安否・人数確認はスムーズに行えた。今後、様々な想定を付与した訓練する必要がある。また同日に、連絡システムを利用した帰宅確認訓練も実施した。
教育環境 の整備	安心・安全な環境の確立	21	日常から施設・設備の維持管理に努め、安心・安全で質の高い学習環境の整備を進める。	B	今後も引き続き、修繕箇所については教員、技術職員と連携してスピード感を持って対応できるよう努めていく。快適に学校生活が送れるよう老朽化した普通教室等のエアコンの更新や食堂にエアコンを新たに設置した。また、ブロック塀の改修、防球ネットのかさ上げ、体育館のワックスがけ、渡り廊下の塗装、樹木剪定等の施設整備を行うとともに3Dプリンター等DX教室の備品の整備を行った。更に、LED照明への取替、動作解析ソフトを導入した。
	ICT機器導入と管理	22	高度化するICT機器の活用を協力して進め、管理や運用ルール等、ネットワークの維持のためのより良い体制の構築に努める。	B	4月中に学習用端末の配布及び設定を行い、早い時期から授業で活用していくことができた。また、美術工芸専攻の生徒に係る東校舎での設定作業についても計画的に行うことができた。サーバやネットワーク機器の不具合については、早期に把握し対応を行っているが、業者側の対応の遅れなどから、速やかな改善が行えていない箇所が残っている。高等学校DX加速化推進事業でグラウンドと体育館のwifi環境を整備し、校内すべての施設でwifi環境が整うようGIGA校内LAN配線のネットワーク拡張を行った。
研究指定等	府立高校特色化事業(スーパーサイエンスネットワーク京都校)、高校生伝統文化事業(京の文化継承・価値創造推進校)、高等学校等デジタル人材支援事業(高等学校DX加速化推進事業)				
評価	A:十分達成できている(目標以上の成果が得られた) B:ほぼ達成できている(ほぼ目標通りの成果が得られた) C:達成できているとはいえない(成果はあったが、目標に達していない) D:ほとんど達成できていない(ほとんど成果がなかった)				
学校関係者 評価委員による 評価	<ul style="list-style-type: none"> ・社会人としての自覚と責任、デジタルシチズンシップ教育というのは、昨今報道でも大きく取り上げられており、今日本で最も重要な課題の一つであろう。高校だけでなく、中学、大学でも同じことであるが、しっかりと取り組まなければならない項目である。 ・評価については平均値で判断しているが、CやDと評価した分掌や人の意見をしっかりと聞き、改善策に取り入れることが重要である。 ・美化についての評価が気になる。決して新しい建物ではないが、自分たちの環境を教職員と生徒と一緒に美しく整えるということは、大切なことである。 ・部活動や学校行事について高評価であることが評価できる。さらに生徒が自主性や協調性を身につけることができる仕掛けが望まれる。 ・亀岡を紹介する動画の作成などは、地域と関わることができて面白い。今後さらに発展させられるよう、改善に取り組んでもらいたい。亀岡市とのコラボレーションにも取り組んでいる。 ・ホームページの閲覧数・フォロアーが増えた工夫が評価できる。今後の学校の魅力発信に工夫をしてほしい。 ・キャリア教育は人生設計のための経験を積み重ねる大事な機会である。進路実現のための指導と併せて、しっかりと取り組んで欲しい。 				
次年度に向けた 改善の方向性	昨年度との単純な比較はできないが、評価Aの項目が増え、評価Cはひとつとなった。しかし、現状に満足せず、より良い取組ができるようPDCAサイクルの確立を図り、新たな工夫を加えていきたい。評価Bが評価Aになるための具体的な改善策を検討し、速やかに改善を図りたい。評価Cの項目については、具体的な対応策に向けて新年度から取り組む。				